



第1編1章2
唯一神の教え
pp.18~21

イエス・パウロ・ムハンマド

安息日に麦の穂(ほ)を摘(つ)む

ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。ファリサイ派の人々がイエスに、「ご覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。イエスは言われた。「ダビデが、自分も供の者たちも食べ物がないで空腹だったときに何をしたら、一度も読んだことがないのか。アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供(そな)えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか」。そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある」。(『新約聖書』「マルコによる福音書」2章)

信仰・希望・愛

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

愛は決して滅びない。預言は廃(すた)れ、異言はやみ、知識は廃れよう。わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。幼子(おさなご)だったとき、わたしは幼子(おさなご)のよう

に話し、幼子(おさなご)のように思い、幼子(おさなご)のように考えていた。成人した今、幼子(おさなご)のことを捨てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくても、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

(『新約聖書』「コリントの信徒への手紙1」第13章)

本当の宗教心

本当の宗教心とは汝(なんじ)らが顔を東に向けたり西に向けたりすることではない。いや、いや、本当の宗教心とは、アッラーと最後の審判の日と諸天使と聖典と預言者たちとを信仰し、己が惜しみの財産を親類縁者や孤児や貧民、また旅路にある人や物乞いにわけ与え、とらわれの奴隷を贖って解放し、また礼拝の務めをよく守り、こころよく喜捨を出し、一旦(いったん)約束したらば約束を果たし、困窮や不幸に陥っても危急の時にのぞんでも毅然(きぜん)としてそれに堪えていく人、これこそ本当の宗教心というものじゃ。そういうのが誠実な人、そういうのこそ真に神を畏(おそ)れる心をもった人。

(井筒俊彦訳『コーラン』第2章172)